



Title	『撰集抄』の方法：仮託説話・非仮託説話併存の意味に向けて
Author(s)	近本, 謙介
Citation	詞林. 1988, 3, p. 50-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『撰集抄』の方法

「仮託説話・非仮託説話併存の意味に向けて」

近本謙介

一

『撰集抄』という作品において、西行に仮託し体験談として語られる仮託説話と、一話では何ら仮託性を帯びていない非仮託説話とが併存することには興味を覚える。その配列も、仮託説話がある部分では連続し、また単独で現われる場合もあって、構成の問題にも大きく関わっている。自らを一人称として体験談を綴ることは、それ自体説話集編纂において特筆すべき形態であり、それをもって『撰集抄』の特質を論ずることに間違いはないと思われる。しかしながら仮託、非仮託説話が併存することに対する意味づけは課題として残されており、『撰集抄』の全体像把握のために明らかにされるべき問題である。『撰集抄』の構造理解のために、仮託、非仮託説話に見られる方法と

いう点から、考察を加えることにする。

二

『撰集抄』の最終話、巻九第一一話で作者（注一）は、仮託西行を説話の述主とし、「そのかみ、陸奥国の方へさそらへまかりて侍りしに、しのぶの郡くづの松原とて、人里とほくはなれたる所侍り。」として体験談を語る。

漸く奥さまに尋ねいたりて侍るに、松の木のしげれる下に、竹の笈と麻の衣とのこりて、その身はまかりぬと覚ゆる所あり。いかなる人の跡ならむと、まづかなしくおぼえに見るに、そばなる松の木をけづりのけて、かくかきたり。昔は応理円実の学徒として、公家の梵庭につらなれり。いまは諸国流浪の乞食として、をはりをくづのまつばらにとる

世の中の人にはくづの松ばらとよばる、名こそうれしかりけれ

于時、保元二年二月十七日、権少僧都覚英、生年四十一、申尅にをはりぬ

とか、れたり。

此僧都は、後二条殿の御子、富家人道殿の御弟にていまそかりけり。

花をのみ惜しみなれたるみよし野の　こずゑにおつる

有明の月

といふ名歌よみ給へる人にこそ。一乗院覚信大僧正の門弟にてすみ給ひけるが、御年はたちあまりの比、夜、俄に発心して、さばかりさむき比ほひに、小袖ぬぎすて、ひとへなる物ばかりにて、いづちとも人にしられて、まぎれいで給ひにけり。(中略)

高僧伝どものむかしのあとをきく中にも、またはげがさじの玄寶僧都の古は、聞くも心の澄むぞかし。此覚英の君は、猶たけありてぞおぼえ侍る。世を捨つとならば、かくこそあらまほしく侍れ。哀れかなしかりける心哉、かりそめの名利につながれて、玄寶、覚英の心をよそにする事を。(注二)

述主が修業の旅の途中で、遁世者あるいはその跡に遭遇するのは、仮託説話で頻繁に用いられる方法である。この説話から、主人公の覚英についての情報をまとめると、次のようになる。

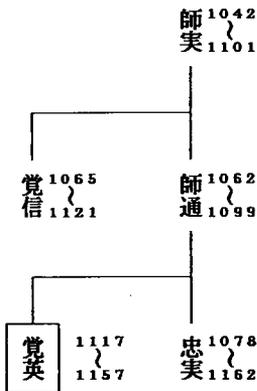
- ① 応理円実の学徒　権少僧都
- ② 後二条殿の御子　富家人道殿の御弟　一乗院覚信大僧正の門弟

③ 保元二年二月十七日　生年四十一で没

覚英が創作による架空の人物であることをふまえた上で(注三)、覚英なる人物の形成のあとを追ってみることにする(注四)。①の「応理円実」とは法相宗を応理円実宗と呼ぶことによるもので、②で「一乗院覚信大僧正の門弟」とすることから、興福寺二門跡のひとつ、一乗院の人物であることがわかる。覚英は興福寺の高僧として設定されているのである。

覚英が架空の人物であることを史実に反する矛盾と捉えるならば、この説話における矛盾はそれだけにとどまらない。説話中に言及される人物をあげ、略系譜で示すと次のようになる。

覚英　後二条殿(藤原師通)　富家人道殿(藤原忠実)
覚信大僧正(藤原師実の子)



師実は頼通の子で、その孫にあたる忠実について、『撰集抄』

卷六第六話の中で、「京極の大殿の御孫、後二条殿の御子にておはしませ給ひしかば、百寮おもくしたてまつりしことは、さらにかきのぶべくも待らざりき。」としており、覚英が超一流の家柄の人物として創作されていることがわかる。ところが、父の師通は一〇九九年に没しているから、覚英を一一一七年の生誕とすることは、創作上致命的な矛盾をきたしていると言わざるをえない。

作為的な人物設定を行いながら、作者は何故このような単純なミスをしたのであろうか。この問題については、最後まで考えることにする。

覚英が創作された人物である以上、作為的に興福寺の高僧とされている訳だが、『撰集抄』には興福寺の僧を主人公とする説話は多い。それを通世・流浪の要素をもつか否かで分けると、

(a) 通世・流浪の要素を持つもの

- 行賀僧都 (卷一第八話) ・ 一和僧都 (卷二第一話) ・ 永玄僧正 (卷二第四話) ・ 良縁僧正 (卷四第二話) ・ 永昭僧都 (卷五第一話) ・ 真範僧正 (卷五第九話) ・ 覚英僧都 (卷九第一話)

(b) 通世・流浪の要素を持たないもの

- 永縁僧正 (卷五第四話) ・ 琳懐僧都 (卷六第三話) ・ 仲算大徳 (卷七第四話)

となる。これらの人物と関わって師弟関係その他で登場するも

のは省いている。述主を西行として体験談を語るといふ形での仮託説話は、卷九第一話のみである。

『撰集抄』の主題とも関わる、(a)の通世・流浪の要素を持つ人々を取り上げてみたい。(a)の中には、永玄、良縁、覚英と、高い僧位にありながら実在を確認できない者が目立つ。これは、(b)の人物が全て実在であるのと対照的である。さらに(a)の実在の者についても、通世の事実が伝えられる人物は一人もいない。

(a)の説話には、『撰集抄』で理想像とする玄資の姿が付与されたあとが見られることにも注意される。『撰集抄』における玄資は、卷九第一話の説話評論部に見られる「又はけがさじの玄資」のように、説話の梗概化された形で登場する。

・ 行賀 (卷一第八話)

三輪といふ所に、おもひ澄ましてぞ籠り給へりける。「清き流れにすゝぎてし衣の色を又はけがさじ」の、玄資のむかしの跡ゆかしく、げにと思ひ入りて、月をおくり日をかさね給へり。

・ 永玄 (卷二第四話)

とはつ国の清き山の水のながれをもとめて、さわがしき君が御代にはすまぬをまさり、世をうしとおもひ、又はけがさじなどいふ衣の色は、むかし奈良の京の御時、わづかに伝へ聞く玄資のむかしの跡にこそ。凡そ、多く世をのがるゝ人の中に、山田もる僧都のいにしへは、聞くもここにこ

ゝろの澄みて貴く侍りしかば、今の僧正の有様、いでこし方、おもひやる末にも、ありがたくぞ侍るなり。

・永昭（巻五第一話）

玄資のむかしの跡に露もかはる事侍らず。山田をもるわざはいかゞ侍りけむ。つぶねとなりて人にしたがひ、みなれざほさして人をわたすいとなみは、めづらかなる事にも侍らざりけるとかや。

同じく玄資が持ち出される巻二第八話の「泊瀬山の迎西」も、『撰集抄』に興福寺の高僧で通世したとして登場する行賀、一和、真範らが、法相宗長谷寺の別当を勤めていることを考えると、あながち無関係とは言い切れない（注五）。興福寺の高僧以外の説話に玄資の名が持ち出されるのは、巻七第九話一例のみで、擬玄資説話とも言うべきこれら一連の説話には、その説話主人公に制約が見受けられるのである。

これほど擬玄資説話が、興福寺の高僧の場合に集中しているのは、作者の作為の結果に他なるまい。その因を、玄資自身が興福寺の高僧であったという、彼の出自に求めることに問題はないと思われる。擬玄資説話が、巻一最終話で玄資と同時代の昔の行賀に始まり、巻九最終話で述主の仮託西行が会出现する現在の覚英に終わる構図は見逃せない。作者は、昔から今に到る理想的人物を、玄資と同じ出自を持つ人々を登場させ、あるいは創作することによって、彼らに演じさせているのである。人物を創作するという行為に、単に伝承するという行為以上の意識

を読みとることが出来る。これを『撰集抄』における玄資仮託という作者の方法として理解することも可能であると思われる。擬玄資説話が、巻一第八話、巻二第八話、巻五第一話、巻九第一話と、巻頭話や巻末話に多いことも指摘できる。高僧説話という範囲まで広げると、巻一第一話の僧賀、巻二第一話の一和、巻三第一話の見仏聖人（注六）、巻四第八話の慶祚大阿闍梨、巻六第一話の玄奘三蔵・真如親王と、巻頭・巻末は高僧説話という視点で説明できるものがほとんどで、これも作者の方法と考えられる。

三

擬玄資説話のひとつである巻二第四話を見ることにする。

さいつ比、帥の大納言経信の、田上といふ山里に住み給ひける。長月の下の弓張の程、たそかれ時になりて、おはひ六ぞ城にがたぶきて、まみ、ありさま、まことに賢くやんごとなき僧の、入り来たりて物を乞ふ事侍り。

（傍線稿者。以下同じ。）

姿をやつしてはいるが只人とも思えなかったため、経信が事の次第を尋ねると、僧は興福寺花林院に住む者で、妻帯していることが寺の知るところとなり寺を追われたことを語る。女と共に住む世話をすることを申し出た経信に対し、僧は一首の歌

を残して行方をくらましてしまふ。

彼大納言、興福寺の貫首の内様に付きて、くはしく尋ね給へりけるに、花林院永玄僧正といふ人、年比世をのがる、心ふかくて、たびたび閉ぢ籠り給へりしを、寺をしみ留め奉りて、心にあらずながらへ給ひしほどに、いにしへ五月の比、貫首にあがり給ふべきよし、そのきこえ侍りしかばにや、跡なくうせ給ひぬれば、弟子どももうつ、心なく侍り。いづくにこそおはすとも聞かざりしかば、流浪し給ふらんよとて、玄覺貫首のすゞろになき給へるなり。

この後、玄資を持ち出す一節が語られ、自らのことに筆は及ぶ。

世を捨つとならば、かくこそあらまほしくて、身のちからもいたく疲れ侍らざりし比、ひろく国々に経まはりて、やむごとなき寺々、面白き所々に徘徊し侍りしが、さし当りて身の憂へも忘れ侍りしかば、かくて一期をすぐしたらんも、罪ふか、らじとおぼえ侍りき。(中略)此僧正は、六そぢにかたぶき給ひぬれば、さ様の所を見いまそからんもかなはでや侍らん。

評論部で自らの経歴を振り返って述懐を述べるといふ形で、仮託が成立しているものである。永玄なる人物は『僧綱補任』にも現われないが、玄覺が貫首となる前に、「花林院僧正」と呼ばれた永縁(一〇四八―一二二五)がおり、永縁その人は、『撰集抄』の巻五第四話に登場している。永玄という説話主人

公の創作は、永縁と玄覺の關係に目をつけ、二人の名前を合わせることによつてなされたものであろう(注七)。それにしても永縁を永玄に変える意識にも、評論部で持ち出される玄資の影がちらついてならない。そこには自ら擬玄資説話を作り上げ、評論部でその玄資を持ち出して、創作した説話主人公に賛辞を送るしたたかな作者の顔ものぞくのである。

作者の作為はそれにとどまらない。登場人物の生没年をあげると次のようになり、

経信(一〇一六―一〇九七)

永玄(永縁 一〇四八―一二二五)

玄覺(一〇九九―一一三八)

経信が玄覺のもとを訪れて永玄の話を書くことは不可能である。この事に関して、渡邊信和氏に論考がある(注八)。氏は経信の生存年代が鳥羽院の時代に意識的に引き下げられていることを述べられ、その鳥羽院の御代は『撰集抄』編著者にとつて、昔とも違い、跋文の寿永二(一一八三)年に到る編著者が自分の時代と考えたものとも一線を画すべき時代であるとする。これは、興福寺の高僧で永縁をもとに創作された永玄(注九)という理想的人物に会おうべき人物として、経信が意図的に持ち出されていることを意味している。経信が会おう永玄について作者は、波線部のように「よはひ六そぢにかたぶきて」といふ人物設定をし、評論部でも「此僧正は、六そぢにかたぶき給ひぬれば」と語ることを忘れていない。この設定は一説話中最

後まで生きてゐることがわかる。これも永縁の生年である一〇四八年から六十年後の、まさに鳥羽天皇の御代の初めを意識しているのであり、経信の生存年代の操作が、決していい加減ではなかったことを思わせる。『撰集抄』作者が、登場人物の生存年代を作為的に、しかもかなりしたたかに操作していることは疑い得ない。我々はこれを『撰集抄』における作者の方法として見ていくべきであらう。

このように綿密に作為的に、出会うはずのない二人の人物を接触させる作者の方法は、巻九第一一話に見られた年代的矛盾を解く鍵になりはしないだろうか。巻二第四話の玄覚は師実の子で、巻九第一一話に登場する覚信とは兄弟であることも、両説話の創作方法の密接な関係を窺わせる。

四

巻二第八話の擬玄實説話では、理想的遁世者と出会う役割は、侍従大納言成通に与えられている。

過ぎにし比、侍従大納言成通卿、東山に住み給ひける比、いづくの者ともしらぬ法師の来たりて、「此殿に宮仕ひ侍らん」といひければ

こうして法師は成通のもとに仕えることになるが、与えられた着物を乞食に施していることが知れ、成通をはじめ人々が徳の

ある僧として扱い始めると姿をくらましてしまふ。

此僧うせて後、廿日ばかり経て、大納言歌よみの内に撰ばれ給ひて、冷泉大納言俊忠と申す人になむ合はせられて、「いかゞして名歌よみて君の御感にあづかり侍らん」とおぼして、此事のみなげき給ひけるに、或日のくれにありし僧来たりて、「君の煩ひ給へる歌、思ひよりてこそ侍れ」とて、

水のおもにふるしら雪のかたもなく 消えやしなまし
人のつらさに

うらむなよかげみえ方の夕づくよ おぼろけならぬ雲
間待つ身を

二首の歌を残して立ち去ろうとするのを呼びとめて名を尋ねる成通に対して、「泊瀬山の迎西」と名乗って僧は再び跡をくらましてしまふ。説話内容といい(注一〇)、評論部に引かれる玄實の説話といい(注一一)、擬玄實説話の典型である。

前節の経信と成通にまつわる説話が、巻八第一一話にある。

鳥羽院の御位のばじぬば、御鞆あそびのありけるに、鞆を御前に出だされんずる有様のことをば、侍従大納言成通、其人にあたりていまそかりけるに、いかなるさはりの侍りけるにや、日のたけぬるまで参り給はねば、帥の大納言経信卿のはからひにて、松の枝に鞆をつけて出されけるに、成通卿参りあひ給ひて、「あしとよ。御世の初の春の鞆をば、柳の枝にこそ」とて、付けなほされ侍り。(中略)

其後はるかに年経て、成通六そぢにかたぶき給ひてのち、
二条院の御代のはじめに、御鞠あそびの時、俊成の、竹の
枝に鞠を付けて被出けるを、侍従の大納言伝へ聞き給ひて、
「此人は父の俊忠の中納言にはまさりにけり」と讚めまこ
え給へり。

「鳥羽院の御代のはじめ」に時が設定され、生没年からする
と決して出会うはずのない経信（一〇一六〜一〇九七）と成通
（一〇九七〜一一六〇）が同じ時代を生きた人物として描かれ
ている（注一一）。成通の「六そぢにかたぶき給ひてのち」を、
「二条院の御代のはじめ」とすることは、成通の生年（一〇九
七）、二条院の御代の初め（一一五八）からして誤認はなく、
むしろ正確だと言えよう。

さらに注目すべきは、成通が俊成の行為に対して、「父の俊
忠の中納言にはまさりにけり」と言っていることである。巻八
第一八話には、「経信の大納言、俊忠中納言とて、当世の好士、
歌鞠の長者なる人」とあり、成通を含めてこれら三人が当代き
つての文化人として登場している。そして、この成通と俊忠の
対立の構図は、巻二第八話でも、成通が歌よみに撰ばれる際に
俊忠に合わせられるという局面に見出すことができる。そこには、
鞠の上での成通の優位、歌での俊忠優位までが意識されて
いるようである。成通と俊忠の直接的な対立を描くような説話
は他に発見できず、それだけに『撰集抄』の中で、特定の人物
に対する共通の意識のもとに二話が創作されていることは、両

話の密接な関係を物語っていると云ってよい。

五

『撰集抄』の説話はその型から、①仮託西行が述主となって
説話を語る仮託説話、②評論部で述懐という形で自らについて
語ることで仮託が成立している説話、③非仮託説話の三つに分
類できる。

巻二第四話の経信の説話は②に分類され、巻二第八話、巻八
第一八話の成通の説話は③に分類される。これらの説話には、
説話主人公に対する玄寶像の付与、その主人公と出会うべき文
化人としての経信、成通といった人物設定、経信の生存年代引
き下げという共通の方法を見ることができた。その方法の中か
ら、説話主人公と遭遇する人物を西行に置き換えることによっ
て、その説話はそのまま第二節で見た巻九第一話の覚英と西
行のように仮託説話として成立することになるのである。巻九
第一話は一話に①に分類される。つまり、これらの方法は『撰
集抄』の①②③といった全てのパターンの説話に共通した、仮
託説話、非仮託説話にまたがる方法なのである。①②③の例と
してあげた説話相互の密接な関係は、述べた通りである。

『撰集抄』作者の手の内には、いくつかの説話創作の方法が
あり、その組み合わせ方によって仮託説話、非仮託説話の別も

現われてくることになり、そういった意味からは『撰集抄』全体の枠組みともいうべき西行仮託すら、他の方法と異質のものであり得ないのである。

六

方法としての西行仮託の様相を、前節の①②のような形以外のものに跡づけてみたい。

『撰集抄』には、説話に現われた歌の出典を明記するものがある。

巻四第四話は、

中比、筑紫の横竹といふところに、範円聖人といふ人いまそかりけり。(中略)いまだ此上人かざりおろし給はざりける前は、吉田の帥の中納言経光と申しけり。

として語り始められる。彼は太宰帥に任せられて筑紫へ下るが、都から連れ下った北方に対する情熱は薄れ、異郷の地で都へ帰る術とてない北方は悲しみにくれ、一首の歌を残して息を引き取ってしまう。北方が残したとする説話中の和歌は、『後拾遺集』に出典を求めることができる(注一三)。『後拾遺集』の詞書は、説話と同一の内容を記すが、左注では「経衛筑前守」の従者の妻の作であるとしている。また、『今昔物語集』は筑前守を「源道濟」として、『後拾遺集』の注と同一の内容の説

話を載せる(注一四)。『後拾遺集』の記す藤原経衛(一〇〇五—一〇七二)、『今昔物語集』の源道濟(生年未詳—一〇一九)は共に歌人として有名な人物で(注一五)、筑前守に任せられたことも史実に基づいている。

『撰集抄』のこの説話に付された評論部を見ることにする。

かの所は、まへは野べ、叢蘭茂く成りて風にやぶれ、虫の声々、草の根ごとにしどろ也。後は山、嵐よりよりおとづれて、松葉琴をしらぶ。右は海漫々としてきはもなし。左は清瀬河岸たかくして、岩うつ浪のくだけつ、ほのかにきこえ侍り。かゝる所に身を一つかくすべき庵引きむすび、左の板の月輪より、香煙ほそくそびきて、空に紫雲の種をまき、念仏の声しづかにして、西に聖衆の迎へを待ちておはしましけるが、天承の比、うせ給ひにけり。まことにいみじき往生し給ひけるとなん。(中略)此歌はよみ人しらずとて、詞花集に入れり。さやうの宮などの、帥にいざなひて西国にくだり給ふなど、載せ侍らんことの、さすがと覚えて、よみ人不知とは入れ給ふにこそ。

『後拾遺集』所収の和歌に対して、『撰集抄』は「詞花集」にあると明記している。従来この事実に関しては、錯誤であるとされてきたが、問題ははたしてそんなに単純なものであろうか。

『後拾遺集』『今昔物語集』と『撰集抄』とは、筑紫に下った人物の名、官職名、歌の作者の夫を誰とするかなどにくい

違いがみられる。また『撰集抄』では、太宰帥となつて下つた中納言経光、出家後の範円について「天承の比」(一一三一一—三三二)に往生したとする。そもそもこの人物設定は、『後拾遺集』、『今昔物語集』からは完全に逸脱したものであり、その時点で作者にとつてこの歌が『後拾遺集』に入集していなければならぬ必然性は、既に失われている。経光なる人物の存在を確認できない今、明確な試算はできないが、「天承の比」に往生した人物に対して詠まれた和歌が、寛治元(一一〇八七)年成立の『後拾遺集』に入集することは、年代的にもかなり無理を伴うことになる。作者は『後拾遺集』の歌を核に説話の改作を行っているのであり、『後拾遺集』と書くべきを誤つて『詞花集』としたのではない。意図的に『詞花集』に入集しているという設定を持ち出したのである。

巻四第二話にも同じ例を見出せる。この説話は、『金葉集』(巻第一〇雑部下・六一一)にある次の歌を、説話成立の契機として形成されている。

おほちにこそすてはべりけるおしくくみにかきつけ
てはべりける 読人不知

身にまさる物なかりけりみどりこはやらんかたなくかなし
けれども

この一首と共に捨てられた子を「志賀中将頼実」、出家後は「今橋の僧正良縁」、彼を拾つて育てた人物を「富家の大殿」(藤原忠実)とし、頼実は「興福寺の千覚律師」のもとで出家

したという設定で、説話が構成されている。

歌はよみ人不知とて、詞花和歌集にのれり。彼集を披くた
びに、この歌の所にいたりて、そゞるに涙のしどろなるに
侍り。(注二六)

評論部で『金葉集』所収歌について、『詞花集』にあると明記されている。説話主人公の「今橋の僧正良縁」についても、「目出たき智者にてなむいまそかりければ、僧正まで成り給ひてけるなるべし。」と尤もらしく語るが、『僧綱補任』にそのような人物は現われない。この説話もおそらく第四話と同じく創作であることを思うとき、「彼集を披くたびに」涙を流すまで語らずには(仮託西行に語らせずには)いられない作者が、単なる錯誤で、説話成立の契機となつた歌の歌集名だけを不注意に誤るといふことは考え難いのである。

『詞花集』の成立は仁平元(一一五一)年、その撰集に際して西行と交渉のあつた寂超(藤原為経)は、父為忠の遺詠を整理して撰集資料としたが、兄弟の歌なども含めて、西行に下見を依頼している。西行自身も『詞花集』に読人しらずとして、「身をすつる人はまことにすつるかはずてめひとこそすつるなりけれ」の歌で初めて勅撰集入集をはたしている。

第四話の評論部の初めには、範円の通世した筑紫の横竹の様子を「かの所は」として自ら確認した口調で書いている。『撰集抄』には場の描写に類似表現が数多く見出せるが、ここでの口調が体験に基づくものになっていることに注意したい。第二

話の「彼集を披くたびに」云々の一節も一人称によって述べられており、これらは仮託西行の体験をふまえた上の記述として読むべきであり、仮託説話のひとつの型と位置づけることができる。『詞花集』は歌人西行と関連があり、四十歳を前に成立し、その後老年を迎えた西行が庵で「彼集を披くたびに、この歌の所にいたりてそゞるに涙のしどろなるに待り。」と感懐を洩らすのに最も適した集であったのである（注一七）。仮託のひとつの型としてこれらの感懐を読むとき、それは臨場感と切迫感のある表現として響いてくる。

歌集名を意識的に変えるという方法は、特定の人物の生存年代をスライドさせるという、先に見てきた方法と類似しており、これも西行仮託の一樣相で、巧妙な趣向とも呼ぶべきものであると考える。

七

説話に登場させる人物の選択や時代設定には、『撰集抄』の方法とも言える作者の作爲的なものがあり、それは仮託説話、非仮託説話に共通で、西行仮託という方法もその中に位置づけられることを見てきた。

『撰集抄』の最終話、巻九第一一話の覚英創作は、その周到な人物設定にもかかわらず、父とする師通の死後に覚英が誕生

するという矛盾を内包していた。

師実の子の覚信は、興福寺の一乗院門跡に貴種入室の初めで、巻二第四話に登場する、覚信とは兄弟の玄覚もまた一乗院門跡を勤めている。さらに彼らの兄弟の尋範は大乗院門跡を勤めており、興福寺との関係は密接なものである。そしてこの家系は、最終話で理想的な遁世者である覚英を創作するのに好都合だったのである。巻九第一一話は、架空の人物覚英を興福寺に縁の深い人物として創作し、目的である玄寶像を付与し、その発見者を西行として仮託説話の枠組みをはめこむといった、作者の手の内のものを駆使しつつ構成された巧妙な最終話ではないだろうか。『撰集抄』中のいたる所で用いたいくつかの方法を交錯させて説話を語りながら、評論部では「昔の玄寶にも勝るほどの人物だ」と、自らが作り出した人物に賛辞を送り、作者は『撰集抄』説話に幕を引くのである。

そうした中で、矛盾をきたしてまで覚英に「保元二年」没、「生年四十一」という細かい人物設定を行わなければならなかったのは何故か。保元二年に四十一歳という設定からすると、覚英の生誕は永久五（一一一七）年となり、西行の生誕、元永元（一一一八）年と全くと言っていいほど一致している。『撰集抄』の中で仮託西行は、四十から五十代の多くの理想的人物を語り、老いて猶彼らに及ばぬ自らを嘆いている。覚英の没した「四十一」という年令もその理想的人物たちを象徴するものであると言えよう。覚英は、西行と同時に生まれ、修業の身で

猶理想的遁世者らに及ばない仮託西行の対極におかれた、仮託西行の分身でもあったのである。覚英という人物創作に綿密な方法をとりながら、矛盾をきたしてまで父とする師通の没後に覚英の生誕を引き下げねばならなかったのは、この西行そのものへの仮託が意図されたためではなからうか。最終話で作者は、西行を述主として語らせると同時に、その仮託西行と同じ人物である覚英を作りだし理想像を演じさせた、つまり仮託西行にさらに仮託した人物を案出するに到ったのである。

『撰集抄』における仮託説話と非仮託説話とは、その方法と
いう点で密接な関係にある。『撰集抄』の構造理解を目的とし
て、『撰集抄』の形成の過程で、仮託説話と非仮託説話が併存
してきた意味について考察を加えた次第である。

注

- (一) 説話の創作の問題を扱うため、敢えてこの語を用いることにする。また、増補の問題は措くこととする。
- (二) 本文の引用は、『撰集抄』（小島孝之・浅見和彦編 桜楓社 昭六〇）による。以下同じ。
- (三) 角田文衛氏『王朝の明暗』（東京堂出版 昭五二）所収の「覚英僧都」、その他にふれられる。

(四) 仁平恭治氏「『撰集抄』序説——西行仮託と説話

の創作——」（東北学院大学論集（一般教育）七四 昭五七・一一）に、覚英その他本稿で取り上げる数人の人物の創作について論じられている。

(五) 長谷寺は十世紀末頃から、興福寺の支配下におかれている。その経緯については、『豊山前史』（長谷寺 昭三八）に詳しい。

迎西説話の評論部でも、次のような形で玄奘が引き合
いに出される。

(六) げにもしづかに案ずれば、生きとし生ける物、ありけらのたぐひまで、おもひ放つべき物にはあらざりけり。我等も多百千劫の間、鳥獸と生れて、秋の田のおどろかすなる山田守る玄奘僧都の引板のこゑにおどろく、むら雀にてもや侍りけむ。

見仏を高僧とすることに問題は残るかと思われる。巻三第一話が第一次成立時から存在したことに對して稿者は否定的な意見を持つが、次話に「青蓮院の眞蒼法眼」の高僧説話があり、巻三巻頭も高僧説話で始まると考えておく。

(七) 前掲（注四）論文に指摘がある。

(八) 「『撰集抄』における源経信」（中京大学文学部紀要 一五一—三 昭五六・一）

(九) 永玄が説話中で、経信に對して歌を一首詠み残して去

るのも、歌僧としての永縁をモデルにしたことと関係があると思われる。

(一〇) 『発心集』巻一第二話の、玄實が伊賀の郡司のもとに仕え、主人の窮地を救うと同時に姿を隠す説話と同型である。

(一一) 前掲(注五)参照。

(一二) 前掲(注八)論文にふれられている。

(一三) 『後拾遺集』巻第一七雜三・一〇〇六

京よりぐしてはべりける女をつくしにまかりくだりてのちことをんなにおもひつきておもひいずなり侍にけり、をんなたよりなくて京にのぼるべきすべもなくはべりけるほどに、わづらふことありてしなんとしはべりけるをり、をとこのもとにいひつかはしける 読人不知
とへかしくないくよもあらじつゆのみをしはしもこと
のはにやかかると

或人云、このをんなつねひらちくぜむのかみにてはべりける時とにもまかりくだれりける人のめになんありける、かくて女なくなりければつねひらのちにききつけて心うかりけるものものふの心かなとてをとおひのぼせられはべりにけり

(新編国歌大観による)

(一四) 卷第二十四「筑前守源道濟侍妻、最後讀和歌死語第五十一」

(一五) 經衡には『經衡十卷抄』(散佚)、『經衡集』、道濟には『道濟十体』、『道濟集』などがある。

(一六) 広本諸本が『詞花和歌集』とするのに対して、略本は『金葉集』とする。

(一七) ちなみに『千載集』(文治四(一一八八)年成立)は、『撰集抄』跋文に記される寿永二(一一八三)年以降の成立である。

(本学大学院博士前期課程)